

笑顔での診療を心がけて

「医師」の研修期間

ある日突然、5月号のコラムで執筆した新保先生より、「若手医師の生の声を書いて欲しい」と当コラムのお話をいただきました。しかも、できるだけ軽いタッチでという注文も添えて。ご期待に添えるか分かりませんが、一人の若手医師としての今の思いを書かせていただきます。

私は、この春初期研修を終えたばかりの3年目の医師です。医師に就くまでを簡単に説明しますと、私たち医師は、6年間の医学部での大学生活を終え医師国家試験に合格してはじめて医師になることができます。そして「研修医」として2年間の初期研修期間があり、複数の診療科を数か月単位で経験し、様々な知識や技量を身に付けます。簡単に言えば見習い期間ですが、もちろん初心者マークなど付けていませんし、実際に第一線に立って診療にあたります。

最近「レジデント」というテレビドラマもありましたので、こちらの方がなじみのある方がいらつしやるかもしれません。初期研修では様々な症例を経験します。特に自治医科大学の救命救急部（ER）では、大学病院という地域の中核病院として、1次〜3次救急（軽症〜重症まで幅広い症例）を経験することで医師と

して一回りも二回りも大きくなりま

す。また、初期研修期間には多くの尊敬できる素晴らしい先輩医師や、頼もしい同年代の医師と出会うため、今後続く医師としてのキャリアにとって貴重な糧となることは間違いありません。

ところで、ドラマや書籍から、研修医と聞くと過酷な生活を想像する方もいらつしやるかもしれません（ちなみにレジデントとは、病院住み込み医^①という英語がもともとの意味です）が、以前と比べて現在の制度では研修医は非常に守られており、医師としての生活に自分プランの日常生活をある程度取り入れることができます。初期研修を終えると、一般的には専門の診療科を決めてその道に進みます。私は現在、外科系後期研修プログラムを選択し、整形外科、形成外科、脳神経外科などをさらに1年間研修する予定であり、そのうえで将来進む道を決めたいと考えています。

地域に育てられながら

私は生まれも育ちも下野市で、大学ははるばる九州に行きましたが、栃木県の医療に貢献したいと考え自治医科大学附属病院に就職しました。さすがに地元だけに、病院で友人に



ERローテート時の同期と。互いに切磋琢磨している頼もしい仲間です

出くわしたり、私を知っている方からも話しかけられる場面があります。が、そのような時はほっとする一方でどこか恥ずかしい気持ちになります。

それはさておき、外来や病棟で出会う患者さんからすれば私を医師として頼ってきているわけなので、日々気を引き締めて臨んでいます。特に、医師3年目に入り、研修医という肩書きが無くなった今、働き始めた2年前とは異なる責任感や不安が生まれてきました。専門科に細分化して

自治医科大学附属病院 医師3年目
外科系後期研修医

にしむら たかひろ
西村 貴裕

いる現在の医療ですが、医師として、内科・外科・小児科等限定せず診る必要があるのだから勉強しても足りません。私は医師になってわずか2年ですが、医師は仕事をしたうえで相手から「ありがとう」と感謝される素晴らしい職業だと感じています。それだけ、命の現場で人の命と生活に向き合う大きな責任がありますので、慢心することなく日々気概・知識・技量を蓄え、患者さんに還元したいと考えています。ここで「地域の皆様の力になりたい！」と大口を叩いたら格好がつくのでしょうか、いかんせん未熟者です。むしろ現場で辛いのは患者さんであるのにもかかわらず、私たち医療従事者に温かい言葉をかけてねぎらってください。することも多く、たいへん励みになります。まさに、地域に育てられていることを実感します。

病院という不安を否めない現場で、皆様に少しでも不安を払拭していただけるよう、私は明るい笑顔で皆様のお話に耳を傾け診療に当たることを心掛けておりますし、これから継続していくつもりです。

それでは、下野市の皆様、今後ともどうかよろしくおねがいいたします。季節の変わり目ですので、お体に気をつけてお過ごしください。